

昭和二十八年

ポプラの秀小雨にけぶり卒業期

読み11 ぽぷらのほ こさめにけぶり そつぎようき

季語11 卒業期（春）

ポプラは榮助の居住範囲の傍にはあまりない稀な木である。ポプラの秀はポプラの花、ややずんぐりした樹勢の雌木が初夏に付ける。すぐ大量の綿毛を飛ばすので、ここではあの綿毛を付けた木の事を言っているのかもしれない。元教員の黙榮にとって卒業と云うのは気になるのか卒業期の句がいくつがある。

寝惚雞ときをしきりに梅月夜

読み11 ねぼけとり ときをしきりに うめつきよ

季語11 梅、梅月夜（春）

鶏が時ならぬ時、ときを告げた。鶏問惚けるのか、それともあまりに明るい梅月夜に朝と勘違いしたか。雄鶏の声は大きいので迷惑でもある。

誘い合う声のみぢかく寒の樵

読み11 さそいあう こえのみぢかく かんのもま

季語11 寒（冬）

この三句は順序と季節が入れ違っている。寒のとあるのでこの句が最初に来るべきであろう。

広葉樹は葉を落としている冬に切る。榮助の身近では、薪にするために樵の木を切る作業が最も一般的でこれを「山切り」と称した。真丸のドン

グリをつけるあの樵である。

薪は自家用の他に、葎崎や甲府の老舗旅館や飲食店に売った。厳冬期には風も強く寒過ぎるので、少し寒さが緩んだ頃から山切りは始まる。でえぎ11 台木から五く六本生えている直径十五センチ位の若木を切り倒し、その場で枝などを落として解体し、丸太にして家に運ぶ。

庭先にうずたかく積まれた薪の長さに切る前の丸太、丸太のままの薪、父の気負わず日が一坦々と何日間も続けるプロの技の薪割り、割った薪の香り、は春を告げるものでもあった。裏に薪専門の薪小屋があったほか、倉の北側などにも割った薪がびっしり積まれていた。売った後のお客様在庫を生産者側が管理していたのだと思われる。

句集概陰は、昭和二十八年のこの三句で突然終わっている。